

# 震災後論

【6】

たい」とい  
うような強  
い言葉が、  
対外的にも  
国内的にも

らも懸け離れています。実  
体のない、非常にもろさを  
抱え込んだ「夜郎自大」が  
踊り、そこへの異議申し立  
ての言葉は萎縮してしまっ  
ている。

大半ではないでしょうか。  
大切なのは、白か黒かで戦  
い、反対言説を唱えること  
でなく、迷いながらも時代  
や世界と触れ合おうとする  
人々の心のひだに触れる言  
葉です。

小説「心」と、「心の力」  
という人生論です。  
政治学者なのに何をやっ  
ているのかと言われます  
が、それでいい。情念を持  
った強い言葉に、理だけで  
対抗しても通じません。違  
う形の情を提示することが  
その境界設定が成り立  
つ。

あの日からまだ3年。行  
方不明者は2千人以上で  
す。残された人は、具体的  
な暮らしの中で亡くなった  
人のことを思い出すわけ  
ですが、そうやって生と死が  
つながっていることへの想  
像力が、社会からなくなっ  
ているようです。

はじけています。  
その一方で被災地の方や  
原発事故に苦しむ方の言葉

ただ、私は日本が右傾化  
しているとか、極端に走っ  
ているとは思いません。ナ  
クしました。3月11日以降  
大切なことです。

3月11日が投げ掛けたメ  
ッセージは「普通であるこ  
と」とそうでないことの境  
界が消えてなくなるとい  
うことでした。「あの人た  
ちは震災に遭い、あの人た  
ちは原発事故に遭った。でも

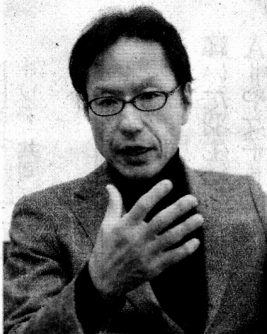
大切なことです。  
巨大災害は今後も確実に  
起きる。心の筋繊維を太く  
し、遠ざけてきた死や病と  
いった「普通でない」出来  
事にどこかで触れておくこ  
とが、今のわれわれには必  
要です。(おわり)

たないのです。  
巨大災害は今後も確実に  
起きる。心の筋繊維を太く  
し、遠ざけてきた死や病と  
いった「普通でない」出来  
事にどこかで触れておくこ  
とが、今のわれわれには必  
要です。(おわり)

## 「強い言葉」に違和感

姜尚中さん

### 心のひだ触れる大切さ



政治学者の姜尚中さん  
かん・さんじゅんま  
50年熊本市生  
れ。聖学院大教授。二  
著書に「母一才モ。二  
一」「悩む力」など

経済成長に取りつかれた  
状況も顕著です。その一つ  
が東京五輪で、社会の雰囲気  
は表層的に明るくなった  
ようですが、目を凝らすと、  
震災と原発のことがよどん  
で、おりのように沈んでい  
ます。それを拭い去れない  
からこそ「強い日本であり

はなかなか表に出てきませ  
ん。代弁するかのような言  
葉が被災地の人々の心を踏  
みにじりました。東京が「福  
島から250キロ離れてい  
る」から安全だという言葉

に親和的な層は限られてい  
ます。強い言葉に違和感を  
覚えながら、自分の思いを  
表現できず迷っている人が  
死と向き合う青年を描いた

死と向き合う青年を描いた

死と向き合う青年を描いた

死と向き合う青年を描いた